

3) 資料収集・修繕事業

幸喜 淳¹ 鶴田 大¹

キーワード：近世琉球絵画・闘鶏図・蛍光X線調査・分光色材調査・解体修理・琉球沖縄陶器・カラーフィル

1. はじめに

本事業は、当財団所蔵の①『闘鶏図（闘鶏花房之図）』および②陶磁器類の修繕事業である。

①は、文献資料で5点以上確認できる琉球王国時代「闘鶏図」5点以上のうち現存3点（いずれも財団所蔵）のうちの1点であり極めて貴重な作品である。3点とも経年劣化が著しく一昨年度から3カ年の修繕事業として進められ、本作品の修繕を以って終了した。

②は首里城火災で損傷を受けた近世～近代の琉球陶器類と東アジアの古陶磁である。いずれも尚王家との関係性など今後の調査が期待される資料群である。修繕方法として、文化財修理を目的に英国で発達したカラーフィル技法を用いた。次年度まで続く継続事業である。

2-①. 「闘鶏図」の解体修理と科学調査



写真-1 闘鶏図（闘鶏花房之図）：首里王府の絵師・毛長禧（1806～1865）が1843年に描いたことが画賛からわかる。画像は修復を終えた作品の全図（左）と本紙（右）。

1) 解体修理および関連調査

解体修理は表具店・墨仙堂（京都市）が担当した。「闘鶏図」3点の解体により次の点が明らかになった。(1)3点共、大規模な解体修理が1回以上実施されている。(2)3点共、破損部分の修繕（欠損部

の補修）が古い時期に施されている。(3)修復技法は部位により多様だが3点が同時期に修繕されたことが認められる。



写真-2 修繕方針に従って表装裂の付け廻しを施したのち、最終的な確認・協議をおこなった（京都・墨仙堂）

表装裂は本資料の制作当時の原装でないと考えられたが、一定の歴史性（鎌倉芳太郎調査時の表装）を考慮し、そのままの裂地・形式に復した。

解体修理では裏打ち紙の打ち直し（四層）、本紙・表装裂の汚れ除去及び補修を実施した。本紙補修（補彩・補紙）では旧来の補修をなるべく活かす方針で、かつ現在考えうる最適な方法を試みた。

また本作品では、前回修理の際の表装裂付け廻しの糊による本紙表面の剥離（合剥ぎ）が他2点に比べて著しかった。このため（他2点が従来の表装裂の付け廻しを外側＝原装位置にし、隠れていた描写部分を露出させたのに対し、本作品は前回修理の付け廻し位置に復した。

また将来的な損傷を最小限に抑えるために太巻添軸を誂え、掛軸を太めに巻くようにした。桐箱については従来の三幅対一箱を改め、1点ごとに一箱とした。これは3点が元々独立した作品であると判明したためでもあり、また1点ごとに展示・貸し出しを行う便宜等、保管上の利点を考えたためでもある。

2) 文献資料調査および科学調査

「闘鶏図（闘鶏花房之図）」の画賛には「1843年に尚育王の命により佐渡山安健（毛長禧）が『花房』という名の闘鶏を描いた」という内容が記述

¹琉球文化財研究室

され、毛長禧の基準作といえる。しかし他 2 作品の筆者・作品名については再検討が必要である。現在、「闘鶏図（闘鶏早房之図）」とされる作品の同定については鎌倉芳太郎が本作品と同筆と判断した（『沖縄文化の遺宝』）ためであるが、箭木康一郎氏（墨仙堂）の観察によればその描写にはかなりの隔りがある。「闘鶏図（闘鶏はなたれ之図）」の題名は鎌倉が確認した「闘鶏はなたれ之図」という墨書外題（現存せず）に依るが、筆者は慎思仇落款『闘鶏尾花之図』と同筆と鎌倉芳太郎が判断したためであり、その後の詳細な検討はみられない。今後の研究課題となる。

「闘鶏図」3点科学調査としては、蛍光 X 線調査（仲政明氏 嵯峨美術大学）・分光色材調査（佐々木良子氏 京都工芸繊維大学）を実施し、本紙料紙については繊維組成試験（高知県立紙産業技術センター）を、また表装裂については繊維鑑別及び染料部属判定試験（京都市産業技術研究所）を実施した。その結果、白の色材は主に鉛白であり、料紙素材は宣紙（青檀＋稻藁）であるなど琉球王国時代の絵画の特色がうかがえた。これら科学分析結果は佐々木氏を研究代表者として2022年度6月の文化財保存修復学会で発表報告された。

なお表装裂の試験では経糸が絹、緯糸が木綿と判明。また藍色は直接染料によるものであり20世紀初頭以降の裂であること、つまり作品制作当時のものでないことが確認された。

2-②. 陶磁器類の修繕(カラーフィル技法)



写真-3 カラーフィル作業①: 修繕品の本体をエポキシ樹脂で接合し、透明の色材を含む基本の色材で色合い・質感の樹脂を、接合部分に最小限の添付をおこなう。

②の陶磁器修繕事業は、近代英国で発展した陶磁器文化財修理の技法であるカラーフィル技法によって進めている。カラーフィル技法の主な特色は次の通り。(1) 作品本体を削ることなく部材を接合できるため作品へのダメージを最小限に留められる。(2) 可逆性のあるエポキシ樹脂による修繕技法であり、溶剤で容易に接合部分を外すことができる。(3) 意匠的な金継ぎ技法と異なり作品の原形に近いイメージを復元しうる。

既に令和3年度、琉球古陶の名品『呉須線彫文酒注』が、首里城火災による被災資料の最初の修復品として仕上がり同年に沖縄県立博物館にて展示され注目を浴びた。

今年度もカラーフィル技法の先駆的な修繕工房（工房いにしへ）による修繕が行なわれた。貴重な『赤絵鉢』（壺屋 19世紀）など破損の著しい5件が、沖縄にて細かい破片もコンテナの中から探し出すような形で行なわれ、可能な限りの修復が行なわれた。また修繕時間を要する大型の『水盤』（壺屋 20世紀 いわゆる古典焼きの誂え品）など5件については令和5年度までの複数年度事業として名古屋の工房にて修繕作業を進めている。

また事業の一環としてカラーフィル技法のワークショップもおこなわれ、カラーフィル技法の理解を深める機会となった。こうした機会を持つことで、参考資料類などの簡易な接合については、今後、財団職員が自分たちでおこなっていくなどの方向性も検討されることとなった。



写真-4 カラーフィル作業②: エポキシ樹脂の種類は対象資料により使い分ける。大型の作品には接着力の強い樹脂を用いる。完全な復元が難しい作品については、欠損部分をどこまで樹脂で復元するかなど、慎重に判断しながら作業を進める。(名古屋・工房いにしへ)

3. まとめ

①の修繕においては解体修理・科学調査および関連調査により新たな知見も得られた。「闘鶏図」3点は元々は別々の作品であること、表装裂が近代以降の素材であることなどである。解体調査・科学調査の結果を含め、本事業は今後の調査研究課題としても重要なものとなった。

②の修繕においては被災資料の修繕方法について考える重要な機会となった。完全な復元が難しい作品については「被災資料」として展示することを念頭に修繕を進めることになる。

これらの修繕事業によって得られた知見・考察を、今後の調査・研究、展示等にも十分に活用していきたい。

4. 外部評価委員会コメント

〔「闘鶏図」の解体修理と科学調査〕

・絵画史の究明に貢献する事業である。(高良顧問：琉球大学名誉教授)

・「闘鶏図」①～③が、修理に伴い、科学調査も実施したことは高く評価する。また、国内最大規模の「保存修復学会」での発表は重要で琉球絵画研究への貢献となる。(宮里顧問：沖縄県文化財保護審議会委員)

〔陶磁器類の修繕(カラーフィル技法)〕

・財団の存在意義を高める事業である。(高良顧問：琉球大学名誉教授)

・最優先される重要な事業であり、成果の公表による文化財の普及啓発にも繋げて欲しい。(宮里顧問：沖縄県文化財保護審議会委員)